「常呂の開拓について」（抜粋）　奥泉勝雄
大正時代の日吉地区での農業と暮らし

『昭和63年度オホーツク大学文集トーコロ』掲載

私の両親は北海道の開拓をやってみないかという親戚の方々の勧めで、明治39年に山形県から常呂村に移住してきました。２ヶ年ほど日雇いの仕事をして、明治40年に旧地名上川沿（今の豊川）の18号に関口さんという方の小作に入り、北海道の農業を始めて２年間経験をして、明治43年に開拓に入るため、入植地に小屋のような掘っ立ての家を建て、常呂村字太茶苗27号線付きに落ち着いたとのことです。が、この土地は前入者が開拓を放棄した土地であったということです。所有面積は山林の約３町歩を入れて原野ともに15町歩で、前入者の開いた面積は約７～８反歩ほどであったとのことです。なお、近所には３戸ほどの入植者がいて大変心強かったと言っておりました。

それから後は一心に開墾に専念したが、何せ立木が密集しているので、立木を切り倒してもその木の片付けに大変苦労したとのことです。

当時は機械も馬もなく、すべて人間の力だけなので、片付けるのもなかなか困難なため、木を切り倒すときにも木が集まるように切り倒し、それにどんどん火を入れ、焼いて片付けたと言っておりました。

片付いた後には作物を蒔かなければなりませんが、畑を全部耕すことは労力的に不可能です。荒れ地なので雑草はあまり出ないので、削り蒔きという鍬でスジを切るようにして、そこに早い順に蒔きつけをします。早い作物の順番は青エンドウ、小麦、裸麦、芋、小豆、大豆、豆類、イナキビ、カボチャ、そばの順です。

次はいよいよ収穫に入りますが、まず早い作物から収穫します。青エンドウを刈り取りして２～３日土干して少し乾いたら棒を立て、その棒に積み込みますが、何せ刈り取りする作物は一手一手、手で握って刈り取り、土の上に置き、土乾をしてから本積みにします。次は裸麦です。取って２～３日土干しして小束にしばり、夕方に何ヶ所にも集め、日が暮れてから麦の穂先に火を付け、焼いてカラから焼き放ち、それを翌日ムシロを敷き、カラサオという道具で打ちたたき麦の脱穀をするのです。この裸麦が一番手数がかかります。

次は小麦です。やはり刈り取りは裸麦同様です。土干ししてだいたい乾いたら小束にしばり丸積みにして、十分乾燥したらシバキ台というものを作り、その台に打ち付けて脱穀するのです。やはり刈り取りして土干しして棒に積みます。乾燥でき次第、カラサオで打ち叩いて脱穀します。

イナキビも麦類と同様の収穫方法です。芋は全部手掘りです。貯蔵法は現在と同じです。だいたい脱穀も終えてえん麦俵、またはカマスに入れ納屋に入れて置き、その穀物を冬仕事としてトミという道具で精選して商人に売るのです。

農産物を売って金にする品目は、青エンドウ、小麦、えん麦、大豆、小豆、菜豆類です。あとは主食として裸麦、イナキビ、そば、他に芋、カボチャやトウキビなどが自家食料です。このような作物を作り、生計を立てていたのです。

さて食糧の用意ができたら食べるまでには大変です。何せ麦、イナキビが主食ですから、それらは精白しなければなりません。当時はでんぷん工場も精米工場もありませんので食

べるものは皆手づきです。
　次は生活の内容について。昔は電気もなく、灯火用には石油でカンテラというランプ。明治の末期頃からサゲランプというやはり石油です。外に出るときは石油の安全灯というランプで、この安全灯で夜遅くまで夜業をしたのです。また、昔はストーブなどはなく、どこの家でもたき火です。家の中に入ると庭があり、中に入ると大きな囲炉裏があり、その囲炉裏にどんどん火をたき、またご飯を炊くのもその火で炊くのです。
　外に出る時は今のようにゴム靴などはなく、冬はズック靴、またはわらで作った深靴などです。
　防寒用として身につける着物はおとなも子どもも木綿生地で着物を作り、中にはネルという生地でヂハンを作りそれを着て、下半身はウンサイという生地でモンペという今のズボン代わりです。股引はネルで作ってはき、外に出る時は冬の帽子は男物ではタコ帽子、または目出し帽とも言います。帽子は子どももおとなも同じです。女は三角帽または風呂敷のようなものを被ります。手袋はテッカエシという物を作り、おとなも子どももはいたものです。足袋は、家の中ではおとなも子どももコール天の足袋を店から買ってきてはいたものです。おとなは外に出る時は足に毛布を巻いてつまごをはき、また外出する時はズック靴です。夏になればおとなは農作業をしなければなりませんので、丈夫な生地を何枚も重ね、強い糸で足袋の形を作り、それを針で刺し、足袋を作ってはいたのです。子どもらは通学しなければなりませんが、夏はぞうり、または下駄を父に作ってもらい、それをはいて通学したものです。毎年このようなことの繰り返しでした。（略）